

印象 1 6 編 — 1 1 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

● 呉田稔（福岡県） ●

手を洗うのは祈りに似ている

* コロナ禍での手洗いは、感染予防ではあるが、祈りの行為と重なって見えてくるから不思議である。

● 合川秋穂（京都府） ●

母の指輪をつけている妹

* この「ドラマ」の断片は、その意味を特定することが難しい。母の指輪は、妹が強請って手にしたものか、あるいは母の形見なのか。また、ここには「妹」と呼ぶ姉の視線も絡んで、その意味を複雑にする。もちろん、読者の想像に任されていて、それを楽しめばいい。

● ソメヤ弘（茨城県） ●

本降りよ体温のある吊革と

* 「体温のある吊革」は、直前まで誰かが握りしめていたからであろう。窓外に激しい雨の情景が流れてゆく。都市の日常の中で、内に向く心の佇まいだろう。

● 風船（東京都） ●

なにもない十一月の淋しさ

* 中村草田男の句に「あたたかき十一月もすみにけり」がある。十一月は終わることによって暖かな日々を転じる。「なにもない十一月」はそれに通じる思いであろう。

● 花澤希海（千葉県） ●

白髪
の教師の手首を
滑り動く腕時計

* 白髪の教師が見届けられているのは「古い」である。痩せて腕を滑るようになった腕時計。そしてそれをそのままに使い続けている姿。シビアな視線に白髪の教師はさらされている。

● 春町美月（大阪府） ●

窓辺のひだまりで
光に透ける父の白髪
寝息にあわせて
かすかに揺れる

* ここで見届けられているのは父の「古い」である。しかし、こちらには憐憫と親愛の視線が感じられる。

● ヒロミヤカザル（京都府） ●

マヨネーズを逆さに戻したって
明日生きてないかしらん

* マヨネーズを逆さに保存するのは、次ぎに使いやすくするためである。それは今後も続く自身の「生」を前提にした行為である。思えば、私たちの行為はみなこの前提でなされていることを思い起こさせる。

● ヒロミヤカザル（京都府） ●

記憶を束ねる
きっかけとしての季節
草木が明滅する理由

* 季節は記憶のホルダーであるという発見に惹かれる。最終行「草木が明滅する理由」への飛躍も心地良い。

● 合川秋穂（京都府） ●

図書館の本を逆さまにして帰る

* 梶井基次郎の檸檬爆弾の作者版だろうか。

● 板倉萌（兵庫県） ●

シンクで
使ったお茶碗に水をかけながら
生きているんだなあと
思う

* 「生きているんだなあ」なんて思うのは、こんな何でも無い瞬間であろう。テイタイムの後の、何でも無い後片付けの時間である。

● 西緑花（京都府） ●

初者みつけ！
と思ったら
次々目に入る雪虫
この冬は寒いのだろうか

* 作者の地域では、雪虫が多いときは、冬の寒さが厳しいとされているのかもしれない。雪の前触れのように現れる雪虫は、儚げで人目を惹く。冬への覚悟を迫られる思いにさせられる。

● 長谷川 柊香（宮城県） ●

重力に永久に溺れて蝶も人も

* 宇宙空間へ出ない限り、私たちは生涯地球の重力の中の住人である。そんなことを意識することはまずないが、蝶の飛ぶ姿を切っ掛けに、作者はそれに気づいてしまったのであろう。

● ヒロミヤカザル（京都府） ●

空色の濃さに機嫌をとられる

* 空が深く青いだけで、私たちは慰むことがある。確かに、空にご機嫌をとって貰っている趣きである。

● ヒロミヤカザル（京都府） ●

弾む手足を鎮める朝日
だし巻き卵にかけたラップが
光を蓄える

* こんな若々しく、輝かしい朝を迎えたいものだと、羨望する。「ラップが光を蓄える」に才能まで輝かせて見せている。これも羨望に値する。

● 宇井麻千（大阪府） ●

やめるときも
すこやかなるときも
干からびたミミズが
雨に流れる時も

* 婚姻の誓いの言葉のパロディ。三行目、四行目は笑いを誘いつつも、二人以外の世界の存在を織り込んでみせている。

● 春町美月（大阪府） ●

河川敷で失くしたボール
みたいなの
何でもない筈の喪失が
時々
胸の奥で光る

* 誰にも経験のあることだろう。すっかり忘れていた小さな場面の心残りが突然蘇ってくることがある。「河川敷で失くしたボール」の比喻が巧み。確かにこんな感じと思わせる。

・最後に記入のために、作者名を確認して、ヒロミヤカザル氏の作品を四編採っていることに私自身驚いた。新しい才能の出現だろうか。全体的に、十一月は落ち着いたトーンでレベルの高い作品が多いという印象であった。